福島市
40号
2020年 1月

市民フォト

ふくしま夢つうしん

2020 JANUARY
Fukushima YUME-tsushin

CONTENTS

2 特集　オリンピックイヤー開幕！
6 ふくしまの魅力人
ふくしま街コス実行委員会 代表　中山丈史さん
インフォメーション
8 もうすぐ！！
オリンピック・パラリンピック Vol.5

特集

オリンピックイヤー開幕！

世界最高峰の夢舞台。オリンピックイヤー開幕！

2020年は、オリンピックイヤー！　いよいよ東京2020オリンピック&パラリンピックの開幕です。福島市では、全55競技のトップを切ってあづま球場でソフトボール日本戦が行われます。世界最高峰の選手たちの熱き戦いが始まる前に、オリンピアンの宇津木麗華ソフトボール女子日本代表監督と、パラリンピアンで元車いすバスケットボール日本代表の増子恵美さんに、五輪に対する熱い思いをお聞きしました。

1／宇津木スタジアムの愛称で親しまれている高崎市ソフトボール場に立つ宇津木麗華監督

2／十六沼公園体育館で行われたボッチャ地区対抗交流大会でパラリンピック国内開催に期待する増子恵美さん

ソフトボール女子日本代表監督

宇津木　麗華さん

中国北京出身。14歳でソフトボールを始め、25歳で来日。日立高崎に入団後、32歳で帰化。2000年シドニーオリンピック銀メダル。2004年アテネオリンピック銅メダル。2011年から2014年まで女子日本代表監督。2015年からピックカメラ高崎の監督。2016年から五輪ソフトボール女子日本代表監督。

4年に一度のオリンピックは特別な夢舞台。私たちはアジアの代表

この夏に迫った東京2020オリンピックでは、2008年北京オリンピックで日本が金メダルに輝いた女子ソフトボールが3大会ぶりに復活します。現在、日本代表を率いる宇津木監督はオリンピックへの思いを「勝ちたいです。どんどんその思いが強くなっています。アジアから東京オリンピックに出場するチームは日本だけ。アジアの代表としてもとても大きな責任を背負っています。日本開催ですし、とにかく勝ちたいです」と熱く語ります。

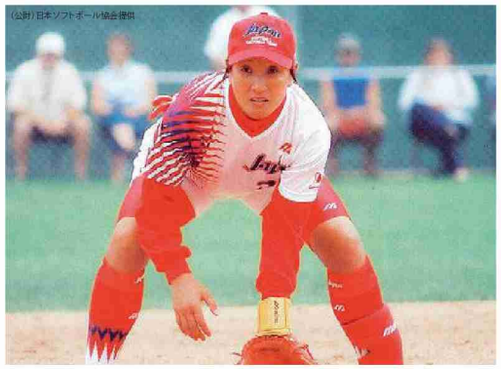
4年に一度のオリンピックは特別な夢舞台。過去2度オリンピックに出場した監督にとっても特別なものです。「選手村には、お互い負けないぞ！という空気が漂っています。世界選手権など、ほかの大会でチャンピオンになることもできますが、オリンピックの金メダルは、そのスポーツの頂点に立つために、人生をかけて努力してきた人たちのみに与えられるものなのです」。

北京五輪では、金メダルを目指して絶対エース上野由岐子投手が413球を力投しました。「投げ続けるエースのために、なんとか1点取る！と、野手たちは一つになりました。2020年のあづま球場の試合では、選手と福島の皆さんと一体となって横浜スタジアムに向かっていくような熱い試合にしたいと思っています」。

勝つために一つになる！それができるのが全日本チームです

また、オリンピックは発信力も特別と宇津木監督。「ソフトボールを知らない人にその魅力を伝えることもできますし、日本が強いこと、開催地の魅力も世界に発信できるチャンスです」。その魅力とは「ソフトボールはスピードももちろんですが、戦略やチームワークも魅力です。ピッチャーが投げるボールのスピードは、瞬きしたら見えないというくらい、まさに一瞬。だからこそ気が抜けない」。

また「戦略はゴルフと似ています。ゴルフは18ホール、ソフトボールは7回、その中でどう戦うかです。打ち方もゴルフにはアイアンやパターとかいろいろあって、一人で全部できないとダメ。バッターも同じです。ソフトボールは団体スポーツなので、選手の体格や性格といったさまざまな違いをコントロールし、勝つために一つになる。それができるのが、今の全日本のメンバーです。基本は勝つこと。勝ちからドラマが生まれる。執念を持って勝利を目指したいと思います」。



（公財）日本ソフトボール協会提供

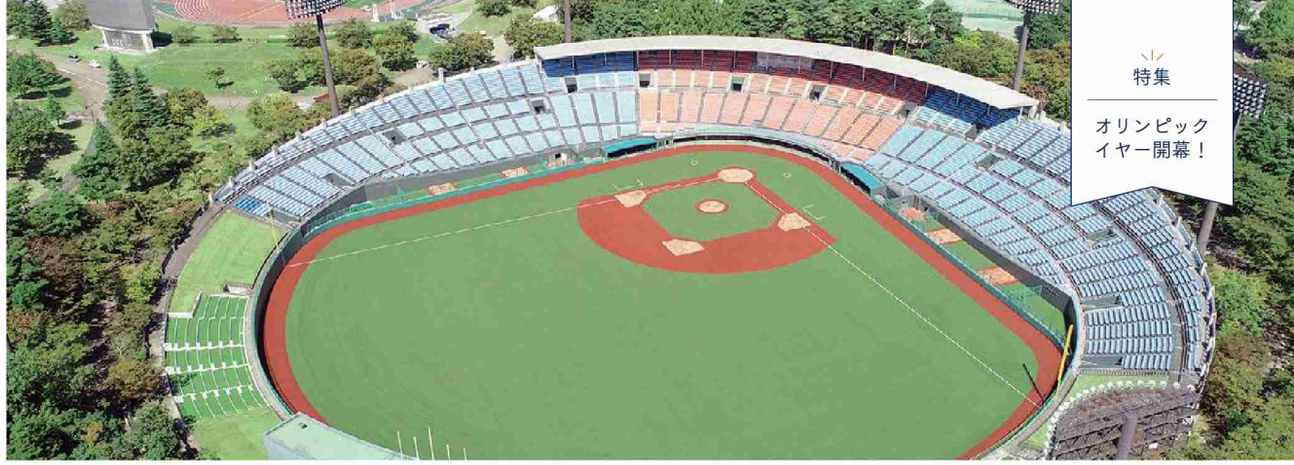
2000年シドニー五輪出場当時の宇津木さん

（公財）日本ソフトボール協会提供

2004年アテネオリンピック出場当時の宇津木さん

特集

オリンピックイヤー開幕！



東京2020オリンピック野球・ソフトボール競技の開催を待つ「福島県営あづま球場」

改修された球場は素晴らしい環境 食べ物もおいしい福島！

あづま球場がある福島市には、合宿も含め以前から何度も訪れているという宇津木監督。「人工芝に改修された球場は、広くて緑がいっぱいで素晴らしいです。食べ物もおいしい。福島に来る時は、選手が食べ過ぎて太らないようにチェックしないといけない」と苦笑い。ご自身は、リンゴが大好物で現役時代は、試合前にご飯の代わりにリンゴを食べていたそうです。

最後に開幕戦を楽しみしている皆さんにメッセージをお願いしました。「我々は、ソフトボールをしているけれど、心はいつも災害に立ち向かう福島と共にあります。だから福島で勝つことは、とても意味があります。福島の皆さんと一体となって勝ちに行く。いい結果になるプレーをしたいと思っています」と宇津木監督。ソフトボール女子日本代表チームがいいスタートを切れるよう、今から熱い応援お願いします。

東京2020オリンピック福島市開催
7月22日㊌7月23日㊍ソフトボール競技
7月29日㊌野球競技

国内開催は一生涯に一度のビッグイベント 頑張っている選手を思いっきり応援しよう！

パラリンピアンの増子恵美さんもオリンピックとパラリンピックは、特別と話します。増子さんには、障がい者スポーツが持つ力とこれからについて伺いました。

元車いすバスケットボール日本代表
増子（ましこ）　恵美（めぐみ）さん

福島県三春町出身。福島市在住。小学5年生でバスケットボールを始める。中高とバスケ部で活躍。19歳で交通事故に遭い車いすに。1992年、母親の勧めで車いすバスケットを始める。1994年、25歳で世界選手権（英）デビュー。以来、2015年リオパラリンピック予選アジア・オセアニア大会で引退するまで日本代表選手として活躍。現在は、（公財）福島県障がい者スポーツ協会に勤務しながら福島県スポーツ振興審議会委員、福島市バリアフリー推進パートナーミーティングメンバー、スポーツ庁スポーツ審議会健康スポーツ部会委員、日本障がい者スポーツ協会技術委員、地域スポーツ推進部委員として、障がい者の生活支援やスポーツ普及に尽力している。

パラリンピアンにとってメダルは感謝と努力の証

世界最高の舞台であるオリンピック・パラリンピックは、誰もが出られるものではないけれど、チャンスは誰にでもあると話す増子恵美さん。しかしそれは狭き門。にも関わらず車いすバスケットボール選手として、4度のパラリンピック出場を果たした増子さん。

特に忘れられないのが、30歳で出場した2000年のシドニーパラリンピックだと話します。「銅メダルを取ったことで、皆さんに恩返しができました。ただやみくもに頑張ってもメダルは取れません。成し遂げる過程が大事なんです。自分の障がいの状況を知り、それに合ったトレーニングを研究し、大学の先生、チームメイト、家族をはじめたくさんの協力者と一緒に努力を続けてようやくたどり着けました。だから私にとってのメダルは、まさに感謝と努力の証です」。

車いすバスケットボールで取り戻した自信

1992年、23歳で車いすバスケットボールを始めた増子さんですが、その前の約1年半は、体育館に行っても見学するだけだったとか。転機になったのが、1995年に開催されたふくしま国体と障がい者スポーツ大会のための選手発掘と育成を目的にしたスポーツ教室でした。

「スポーツ一家に生まれ、子どもの頃からバスケットボールをやっていたので、基本的なボールハンドリングとかができていたんです」。他にもコートの中で出来ることがたくさんあると気づいた増子さんは、どんどん自信を取り戻して行きます。「しかも合宿で上京すると、そこには車いすでも結婚をして、仕事をして、いろんな所に遊びに行って…ということが普通の世界」。目の当たりにした増子さんは「生まれ育った福島で暮らしながら、東京に住んでいる車いすの人たちと同じことをしようと決めました」。

1996年のアトランタパラリンピックを皮切りに、2000年シドニーパラリンピックで銅メダルを獲得。その後も2004年アテネ、2008年北京パラリンピック、さらに2010年世界選手権（バーミンガム）、2011年アジア大会など、2015年に引退するまでトップアスリートとして活躍！

東京パラリンピック開会式は2020年8月25日

仕事をしながら競技を続けてパラリンピアンになった増子さん。「私たちの時代は、オリンピック選手のようにコメンテーターになるなど、セカンドキャリアの形成は難しかった時代。競技を離れても仕事をして、生活して行けるよう後輩にも競技と仕事の両方を勧めてきました。だから福島県のパラリンピアンは、仕事をしながら競技をしている人が多いんです」。

東京2020パラリンピックは、8月25日の開会式翌日から9月6日の閉幕まで、22競技540種目が21会場で行われます。「オリンピックもパラリンピックも自国開催って、生涯に一度と言っていいくらいのビッグイベント。頑張っている選手を思いっきり応援して、楽しんでほしいと思っています」と話してくださいました。

心身の健康維持に役立つスポーツ リミットを決めずどこまでも！

パラリンピック以後も障がい者スポーツが広がって行くことを願い今後の展望について伺いました。「1つは、障がいがあってなかなか社会に出て行けない人のための環境整備です。スポーツが楽しめるようなサポートが進むことを願っています。私が車いすバスケットボールによって自信を取り戻せたように、スポーツは身体と心の健康維持に役立つ力があります。地域間の交流などを通して広がっていくことを期待しています」。もう1つは、障がいの有無に関わらず子どもからお年寄りまで、スポーツでも何でもやりたいと思ったことが、すぐにできるような社会の実現です。

さらに、これから何か始めたいと思っている方には、どんどんチャレンジしてほしいと話す増子さん。「夢を持つことが、生き甲斐や生きる意欲につながっていきます。かなう、かなわないはありますけど、無駄なことは一つもありません。失敗も成功もいろいろ経験してほしいです」。何かを始めようとする時、増子さんたちは「身の丈とかではなく、それ以上！」とよく言うそうです。皆さんもオリンピックイヤーを機に、リミットを決めずどこまでも挑戦していきましょう。

障がい者スポーツの普及に尽力している増子さん。福島市で初めて行われたボッチャ地区対抗交流大会にも携わった

ふくしまの魅力人

みりょくびと

Takeshi Nakayama

思い思いのコスプレを楽しむ県内外から集まった参加者たち

お気に入りのキャラクターに扮する参加者

参加者通算1万人を突破！街を賑わす「ふくしま街コス」仕掛け人

2015年秋からスタートした「ふくしま街コス」は、アニメや映画のキャラクターに扮して福島市のパセオ通りや市街地を歩いて楽しむコスプレ※イベントです。回を重ねるごとに福島市近郊だけでなく県外など遠方からの参加者も増え、通算1万人を突破するほど大人気のイベントになっています。今号の魅力人は、仲間と共に実行委員会を立ち上げ「ふくしま街コス」を育ててきた仕掛け人、中山丈史さんにお話を伺いました。

留学生にイベントの説明をする中山さん

ふくしま街コス実行委員会　代表

中山（なかやま）　丈史（たけし）さん

昭和53年、東京都生まれ。福島市内で起業する学生時代の友人に誘われ福島に移住。東日本大震災と原発事故で全村避難を余儀なくされた飯舘村民の避難先のデータベースづくりに関わる。その後、仕事の垣根を越えて多様な人と知り合い福島市内のさまざまなイベントに顔を出すようになる。平成27年10月、福島県地域創生総合支援事業（サポート事業）補助事業「パセオミューズ」のコンテンツの1つ「ふくしま街コス」の担当となり実行委員会を立ち上げ開催。同30年から単独のイベントとして開催し続けている。

パセオ通りのイベントの1コンテンツとしてスタート

「ふくしま街コス」の発端は、福島市のパセオ通りで開催されていた地域を元気にするためのイベント「パセオミューズ」（2015～2017年度）です。イベントの企画会議で、誰かが「今、コスプレはやっているよね」と発した言葉がきっかけでした。そこからイベントのコンテンツの一つとして「街コス」が始まったのだそうです。途中から「パセオミューズ」のお手伝いに参加した中山さんですが、関わるからには街の活性化の一助となるイベントにしたいという思いがありました。ほかの実行委員も同じで「参加費だけで運営できる体制を築いて継続可能なイベントにしようと決めました」。

開催する度に県内外から参加者が増え1万人を突破

ところが、2015年秋、第1回ふくしま街コスは告知から開催まで十分な期間がとれず、参加者は7人という結果でした。「僕らにとっては神様のような7人ですが、数字的には悔しくてすぐさま冬の企画の準備をスタートしました」。第2回は、パセオ通りのイルミネーションと、全国的に許可を得るのが難しいと言われていた神社の撮影許可を得て、50人が参加。翌年春の第3回は、「パセオ通りはな祭り」と同時開催で120人が参加。夏の第4回は300人。以来、開催する度に遠方からの参加者も増えました。パセオミューズが終了した2018年に単独イベントとして自立。JR福島駅前や市街地で開かれるイベントなどとコラボしながら続け、17回目となった2019年秋には800人が参加し、通算参加者数1万人を突破しました。

目標は街の活性化　準備と連携、協力がカギ

何が功を奏したのでしょうか。「やはり準備と連携、協力だと思います」と中山さん。「コスプレイベントは、暗黙の了解やルールなどがあります。ふくしま街コスの実行委員には、コスプレイベントと、市内のイベントそれぞれに精通している方がいるので、さまざまなリスクを回避することができます。参加費が安いなど垣根も低く参加しやすいですし、協力店さんが増えたことも大きいと思います」。

街コス当日は、街なか広場から福島稲荷神社までのいくつかのルートが撮影エリアになります。店内撮影OKのお店や食べ物を販売する店舗情報を参加者に伝える一方で、協力店にはメニューのアイデアなどを提供し、みんなで楽しめる関係作りに力を入れてきました。最近では、コスプレのまま入店できる協力店が25店にも増えました。「手掛けているものをしっかり育てていけば、さらなる成長も夢じゃない」と熱く語る中山さん。

2月にはMAXふくしまを丸ごと使っての街コス、4月5日には第19回目の街コスが開催されます。ぜひ、出掛けて福島の街歩きを楽しまれてはいかがでしょう。

福島市の街並みを背景にコスプレを披露する参加者

※コスプレ（cosplay）は、コスチューム・プレイ（Costume play）の略。コスチューム（Costume）は仮装や舞台の衣装、プレイ（play）は楽しむの意。

もうすぐ!! オリンピック・パラリンピック Vol.5

福島市出身 佐々木真菜（ささきまな）選手が東京パラリンピックの陸上女子400メートルの代表に内定

【応援してくれる皆さんの期待に金メダルで応えたい!!】

パラ陸上世界選手権で４位となりたくさんの方から応援や励ましの言葉をいただきました。その方々の期待に応えたい！という思いが、厳しい練習でも頑張れるモチベーションです。

東京パラリンピックでは金メダルを目指して頑張ります。そして、応援してくれる地元福島の皆さんに笑顔と勇気をお届けしたいです。

【見どころは最後の100メートル。粘り強さを見てほしい！】

もともと内気だった私ですが、陸上を通じてたくさんの人々と出会い、自分の言葉で自信を持ってコミュニケーションがとれるようになりました。一つの競技を通じて自分を変えることができる。そんな魅力を陸上に感じています。

短距離種目の中で最長で、過酷な種目といわれる400メートル。私の持ち味は、負けず嫌いの性格から来る粘り強さ。特に一番苦しい最後の100メートルの粘りを皆さんに見てほしいです。

佐々木 真菜 選手

▲パラ陸上世界選手権（ドバイ）で４位に入賞した佐々木選手

プロフィール

福島市出身。福島県立盲学校高等部卒。先天性の無虹彩症。小学校で陸上の楽しさを知り、パラリンピック出場の夢を持つ。高校卒業後、東邦銀行陸上部に入部。入部４年目の2019年11月パラ陸上世界選手権（ドバイ）で４位に入賞し東京パラリンピック陸上女子400メートル（視覚障害T13）の代表に内定。400メートルの自己記録は58秒08。東京2020大会では、57秒台を目指す。

福島市×福島明成高等学校 プロジェクトチーム結成！

GAP（ギャップ）食材を使ったおもてなしコンテスト

コンテストはウェブで応援投票ができます!

詳しくはコンテスト事務局ホームページをご覧ください。

東京2020大会に向けて世界各国からホストタウンを訪問する各国・地域の選手などに、日本の食材とおもてなしの心の素晴らしさを発信するため、農業高校などとホストタウン自治体が連携して実施している「おもてなしコンテスト」。福島市は福島明成高等学校（以下明成高校）とプロジェクトチームを結成し、ベトナムの選手や関係者をおもてなしする「実（み）・湧（わく）・満（まん）・彩（さい）　おもてなし計画」を企画しました。

GAPとは?

農業において、食品安全、環境保全、労働安全などの持続可能性を確保するための生産工程管理のこと。東京2020大会では、持続可能性の観点からGAPに基づき生産された農産物しか使用しません。

なぜベトナム?

福島市はベトナムのホストタウンです。ベトナムサッカー代表が東京2020大会に出場が決定した場合、福島市での事前合宿実施をベトナムサッカー協会と合意しています。

▲明成高校プロジェクトチームのメンバー

▲考案したレシピを実際に生徒が調理

明成高校２年生８人が、福島国際交流事業協同組合の方からベトナムの文化や料理の趣向などを学び、おもてなし料理のレシピを考案しました。

生徒が作ったおもてなし料理がこちら！

ベトナムの主食「フォー」の原料である米・米粉をベースにレシピを考案！また、東京2020大会期間中に収穫できるモモをメインに福島の特産品である「くだもの」を食材に積極的に取り入れながら、ベトナムの人々が大切にしている「五味・五彩・二香」の精神をコンセプトの１つとして取り組んだレシピたちです。

明成高校で育てたお米で作ったおこわ

ベトナム料理の生春巻きにも明成高校産の野菜をふんだんに使用

オクラと豚肉の栄養たっぷり串カツ

米粉ロールケーキ（左）とムースケーキ（右）には福島産の「モモ」と「リンゴ」を使用

市民フォト・ふくしま夢通信

2020年1月1日発行　2020年1月号　No.40

ふくしまチャンネル　fukushimacity　福島市

編集発行 福島市役所 広聴広報課
〒960-8601 福島市五老内町3-1
☎024-525-3710 FAX024-536-9828
E-mail:kouhou@mail.city.fukushima.fukushima.jp

夢通信 バックナンバーは市ホームページで!

FREE Wi-Fi Fukushima City

表紙紹介

生まれ変わった県営あづま球場

全面人工芝となり水はけやクッション性が改善された他、客席やトイレなどもバリアフリー化を図りながら改修された。収容人数は３万人。
東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では、全種目の先頭を切って、ソフトボールと野球の舞台となる。